

# 沖

# 6

2021

創刊雜誌[335]



# 芽山椒

能村 研三

先師登四郎没後二十年

行く春を死でしめくくる人ひとり

先師登四郎はこの句を遺し平成十三年五月二十四日に九十歳でこの世を去った。今年は亡くなって二十年目の節目の年となる。晩年になっても常に自己変革を促し俳句の新しみを追求しつづけた登四郎は、没後二十年を経た今でもなお俳壇でその存在感を強くしていると言える。

今年一月に刊行した『能村登四郎の百句』は昨年十月が「沖」創刊五十周年であったので、その記念の意味も含まれていたが、むしろ今年が生誕百十年目にあたることと没後二十年になることも意識しての出版となった。

幸い俳壇の諸先輩や「沖」の皆さんからもあたたかい反響を頂きこの機会に出版出来たことを喜んでい

る。  
そんなところに、市川市文学ミュージアムの担当者から、今年が「能村登四郎生誕百十年、没後二十

大旗を顎もてたたむ夕永し

芽山椒ぱんと叩いて登四郎忌

湖に降る雨を見てをり軒粽

遠嶺みな牛臥のかたち余花曇

桜葉降る銭湯のありしあと

存続の老舗旅館の幟竿

片寄せの雨戸一枚花疲

木が鋸を啞へしままに春の雷

溝浚へ老巧ばかり集りて

清明や歩きて広げゆく記憶

年」にあたることから、「俳人能村登四郎と能村研三展」を開催したいとの申し入れがあった。

十年前、「登四郎生誕百年、没後十年」の時には、文学ミュージアムの前身の文学プラザが企画してくれたものであったが、この時はまだ私も職員であったので、少し面はゆい思いをもっていたが、今回はそういった気持ちも少し払拭されてこの企画にかかわることができた。

当時は「能村登四郎その水脈」という図録が作られたが、今回はこの図録をもとに加筆編集したものになり「火の系譜 市川が育んだ俳人能村登四郎 能村研三」というタイトルとなった。登四郎に関しては六章、研三に関しては四章の構成となる図録冊子である。

展覧会も七月から来年の一月まで長期に渡って、文学ミュージアム通常展示室で開催される。

能村 研三

産卵に水脈の逆立つ花うぐひ

只中にゐて沈丁を誰も言はず

花筏母は童女に還りけり

狼煙台ありし頂桜濃し

菜の花に溺れゐる子を置き去りに

廢屋になりゆく家に猫の妻

鍬の柄に頬杖しばし春惜しむ

朝、薄暗い縁側の雨戸を一枚開けた瞬間、眼を射るような陽光と新緑の草木の匂いが飛び込んで来た。まさに世界が一変したようなこの世の明るさに、今更ながら圧倒的な太陽の威光を感じるばかりである。

昨日は一日中雨であった。しとしと降り続ける春の雨は、気が休まるようにいてなかなか落ち着かない。登四郎先生に「花溶かす雨やひねもす玻璃越しに」という句がある。昼前に各家を回る農協関係の人が来たので、「雨の中ご苦労様」と声を掛けると、「雨でないで農家の人は居ませんので」という応え、またパソコンを覗いたら「土には良い雨ですわ」とあった。そうだ、我が家は農家なのだ。先生の「花溶かす雨」は美的な感覚であるが、少しばかりの自覚を持ったがゆえに、それ以後の私は雨音が変わる度に玻璃越しの様子が気になった。

真新しい空気に誘われて裏の畑に行ってみると、確かに雨を含んだ土が艶々しい。今日は軽トラで肥料、そして玉蜀黍や枝豆の種、西瓜や南瓜の苗を買いに行こうと思う。

## 蒼茫集

何の日

吉田政江

逸る気の白濁均す春の潮

軋み哭きして流水の白き帯

催花雨や千鳥ヶ淵の水の鬘

\*何の日と夫に問はるる豆ご飯

さくら薬降る石庭へお忍びか

桜まじり律気全うして逝けり

花の店

栗原公子

水音とふ静寂ありけり蝶の昼

\*妖あやかしのひそみてをらむ夜の桜

のどけしや本屋の隅に花の店

初蝶の一心といふ羽づかひ

路地裏に淡き灯ともる荷風の忌

思はざる変換の誤字目借時

花 影

辻美奈子

花影やひやりと触るる斧の柄  
花あかり尾のあるものは身をひくく  
\*桜満つ生者は死者に追ひつけず  
引く波にすこし遅れてさくら貝  
蛇穴を出でめんだうを思ひ出す  
速達に朱の印ふたつ昭和の日

太平洋の端

千田百里

書き出しの決り菜の花蝶と化す  
土擡げはや春筍に曲る意志  
\*春送る太平洋の端を踏み  
引く波の春を連れ去る俊寛忌  
象の背を濡らして涅槃しぐれかな  
肩・肘の押す春陰の回転ドア

乳呑み児

佐々木よし子

まつ新たな木の橋匂ふ桜東風  
\*乳呑み児の足でよろこぶ花の昼  
初蝶の森へ消えゆく白さかな  
しなやかに強風躲し松の芯  
糶もなく終る五十集や霾ぐもり  
惜春や波の曳きゆく虚貝

乗越えて

内山花葉

自撮り棒と乗る人力車桜東風  
触れ合ふは罪と言ふなり四月馬鹿  
乗越えて笑ふ日の来よ花種時く  
陽炎追ふ幸福駅の乗車券  
\*駝蕩やほのと木の香の輪つば飯  
絵のやうなミシュラン料理花ぐもり

# 潮鳴集

三鬼の忌

兵藤

恵

稚の靴

七田文子

\* 火のやうなジャムを煮てをり三鬼の忌  
ゆふぐれの空の低さや梨の花  
蜷の道突き当たるものあるらしき  
雪柳なだるる月日ありにけり  
花ぐもり潮入川の濃く匂ふ

さくらさくらやはらかに空ささへをり  
篝火に桜の見する別の顔  
花種蒔いて夕べ静かな祈りかな  
\* 草青むつまんで運ぶ稚の靴  
堰といふ水の遊び場かぎろへり

ワインウイン

森村江風

春ぞ隔たる

井原美鳥

\* 水平の菜の花空の喫水線  
畝脱くる不良願望葱坊主  
ワインウインの胡散臭さよ亀の鳴く  
風待ちちて芥相乗る花筏  
稚鮎みな真水の磁気に吸はれゆく

\* 蝶生れてしづかに傷む母の家  
一本の蕨と雀とうららけし  
黄塵万丈パールバックの忌なりけり  
ごめ渡る軒の磯着のはためく日  
ブツクオフ春ぞ隔たる書架に子規

朧月

石田静

卒業歌

村上葉子

ダニーボーイを小声で歌ひ青き踏む  
\* 水音はペンペン草の睦語り  
スカーフの原始はヴェール復活祭  
いくつもの別れの果ての朧月  
はひはひを追ふ母の手にれんげ草

あをあをと空へ響けり卒業歌  
落第子山の手線を一周す  
チェロ抱へ看護学生卒業す  
\* 激論の真ん中にある雛あられ  
白梅のたましひ浮遊する日暮

志野袋

平松うさぎ

雨百穀

米田紀子

\* 桜まじ紐の鍵とく志野袋  
陽炎の中に置き去り福島忌  
堅香子や触るれば傷むところあり  
ポケットをはみ出す財布木の芽張る  
栈橋は象の鼻先春へ伸ぶ

山笑ふ八十をみな心の心意気  
かをりまで水に映せり花ミモザ  
懇ろに「生きよ活きよ」と鳥雲に  
白木蓮仏飯の湯気立ち上る  
\* ひと夜さの雨百穀を先づ聴かむ

逃水

くどうひろこ

巡回バス

広海あぐり

逃水を追うて津軽に嫁ぎけり  
殉教を願ふか翔ばぬ残り鶴  
五寸釘尖る城門さくら冷  
卯波立つ海峡背負ふ交番所  
\* 山毛櫨の森神の束ねし大瀑布

峡奥の芽吹きいつせい木霊する  
\* 春惜しむ巡回バスの列につき  
朧夜の火星に水の記憶あり  
土のにほひ水のひかりも雛の頃  
似顔絵を頼むモンマルトルの春

# 沖作品



## 能村研三選

春霖や眼差遠く神馬付つ

千葉

金光 浩彰

天の下媚びることなし犬ふぐり  
新若布湯に早緑を解き放ち

月朧志ん朝逝きてふた昔

\*眼裏の淡き熱りや花疲

牡丹剪り私の手にや静心

牛島 晃江

\*地の母に預けむ種を下ろすなり  
幸福を描くなら庭に花ミモザ

語らねど老い思ふこと養花天

リラ冷えの札幌にゐて愛しき日

立春の天地を繋ぐ間歌泉

神奈川

加賀 莊介

アボカドの種孵りさう春の昼  
柳青む川が曲れば土手曲り

\*春愁のチェロ弾くチェロに耳寄せて

蛇穴を出づ餓鬼大将もうぬぬか

\*雪解川山のいのちの逞しく  
余寒てふ妙義山の放つ神気かな

市川市

澤田 英紀

不死鳥の翔び立ちし跡陽炎へり

初蝶の翅を操る風の糸

春眠し波引く音に誘はれ

佐保姫の羽衣ふはり野に山に

吉村 涼子

薄墨の乾きゆく色春の宵  
春荒や喝と目を剥く仁王像

方丈の一隅灯す雪柳

\*燕飛ぶ梁黒々と通り土間

絵硝子の透けて夕日の涅槃絵図

千葉

里村 梨邨

\*逃水や遙けきものを眩しめり  
糠雨のしづくやきらり初桜

重くなる地球の自転目借時

寺を守る伊八の龍や紫木蓮

\*古伊万里の藍を深むる余寒かな

長野

山岡 純子

みちのくの地揺れ風突き冴返る  
浅春の夢のもつれの目覚めかな

針箱に秘めし恋文おぼる月

眼下には花と棚田と千曲川

\*花の雨黒塀続く武家屋敷

千葉

熊谷 成子

雛飾る土蔵の厚き扉かな  
絵灯籠に火を灯しをり花の庭

古納屋の分厚き梁や落椿

蒔きどきの念を押しけり種物屋

触書の効はさておき花ふぶく

川崎登美子

\*「川甚」のこと寅には告げず春彼岸

春深しガイドブックに増ゆ付箋

球音の間遠やぐるり杉の花

花蘇芳格子硝子のせんべい屋

\*桜東風抜ける老舗の通り土間

栃木

五十畑悦雄

睦みつつ影あはあはと蝶の屋  
炊き上げて色香たちをり嫁菜飯

やはらかな日差しの中の桜草

老いを深めて春眠のさめやらす

埼玉

工藤 良丞

乗込みの鮒や葦辺に袴めきぬ

寺の破風雀の巢藁揺れにけり  
なびけども柳の枝のからまざる

人情や一羽で残る鴨はなし

安曇野や白き稜線畦青む

\*春めくや心の螺子を緩ませて

熊本

石橋みどり

ものの芽の一気に動く雨上り  
流されて流れぬ力藻草生ふ

\*まじまじと津波の記録冴返る

辿り着く風は舟屋へ初燕

愛知

青木 幹晴

田の神よ起きよ起きよと田を返す  
のぞきこむ影に乱るる蝌蚪の陣

膝立ちの列車の窓に花菜風

霾や能登の肋を縦断す

石川

坂下 成紘

肅肅と事務の引継ぎ霾れり  
夕餉嬉し初物と云ふ蛩烏賊

両の手を杖に預けて揚雲雀

雲雀野の今はひばりヶ丘団地

\*まんさくが咲いて百戸の動き出す

埼玉

浜田はるみ

\*放心の池を残して鴨引けり

鬮牛二頭砂塵の中に睨み合ふ

風船が飛んだ日父の肩車

# 飛鷹選評



能村 研三

眼裏の淡き熱りや花疲れ

金光 浩彰

金光さんは館山支部に所属する方でこのところめきめき俳句が上手くなっている。今年の桜は例年より早く開花して、三月下旬を待たずに満開になってしまった。桜の淡いピンク色は人の心を穏やかにさせてくれる。眼裏にある満開の桜の残像に淡い熱りを感じた。桜の美しさに夢中になった後、ふと我に返っていささかの疲労感を覚えたのだ。花の美しさに酔いしれたあとの疲れは、明るい陽射しや咲く花の華やかさのなかに、そこはかとない寂しさを感じさせるのである。桜は人の心を美しさで満たすだけではなく、もの思いに誘ってしまう花でもある。

地の母に預けむ種を下ろすなり

牛島 晃江

種おろしは八十八夜の前後に稲の種籾を苗代に蒔くことで、野菜や花の種を蒔くことは「物種蒔く」とは違って、古くから季語的には区別されてきた。それだけ、米作りは大切だったのだろう。地に眠る母もずつと精勤に田畑に励んだ人のようで、今年の種おろしの作業を終えたことを告げるとともに、米が稔るまで地の母に見守ってもらうことにした。

春愁のチェロ弾くチェロに耳寄せて

加賀 荘介

ソロのチェロの演奏を聞かれたのだろう。憂いを帯びた響きと深くあたたかい音色は心をおだやかに落ち着かせてくれる。チェロを弾く演奏者は、少し前屈みになって自らが奏でる音に聞き入るようにチェロに耳を寄せた。

雪解川山のいのちの遅しく

澤田 英紀

山に積もった雪は春になると雪解け水となって、山の木々の落ち葉にしみこみ、その山清水が集まって谷川となる。雪解川は次第に水量を増し下流へと流れて多くの生き物を養う。雪解川のエネルギーが山のいのちを遅くしてゆく。

燕飛ぶ梁黒々と通り土間

吉村 涼子

燕が巣をつくると、家は栄えるとか、縁起がいいと言われていて、燕のために抜け道を作っている家もある。通り土間の天井の黒々とした梁には今年も燕が巣を作った。作物に害を与える虫を食べてくれることから益鳥とされてきた。

逃水や遙けきものを眩しめり

里村 梨邨

春先に車を運転している折などに見掛ける螢気楼の一種で、行く先に黒い水溜りがあるように見えるが近づくとまた遠ざかってしまう。